

稚氣といふか、無邪氣といふか、こんなものが文治郎をとりつゝんでゐる、文治郎の藝の一面をつゝんでゐるのもこの無邪氣さであり稚氣だと思ふ。

十年一日、落語家は型の如く古いと云はれてゐる、その中でも私の見た文治郎は十年來變らぬ古さをもつた文治郎であるが、今私は彼に何をも望むといふ氣はしない、文治郎は文治郎でいゝのである。文治郎は矢張仕込みの大筒やお文さんで結構である、いつか放送の猿後家は失敗であつた、彼の任ではないと思ふ。ともかく東實名人會で江戸ツ子の中に入つてもつさりした上方調の落語の爲に万丈の氣を吐いて呉れるであらうことそひそかに彼のために祈りながら變に曲りくねつた文治郎論を終る。

全然用意してゐなかつた文治郎論であり、纏める餘裕もなく徴收されたのでほんの書きなぐりで申譯のないお粗末品になつたことをお詫びする。



後家馬子

笑福亭松鶴
カツト 桂 米 之 助

へい一席伺ひますは、秋のお噂で御座ります。所は玉造の稻荷さんの近所の裏長家で井戸端へ長家の嫁さん達が寄り集つたのが話の端緒で、斯ふ言ふ長家の人はあんまり、銀行や債券の話せんもんで、大概は何處の米屋は二厘がた安價とか、何處の酒屋で買ふたら、盃に二杯多かつたとか斯んな話ばつかりして居ます。

「ナアお松さあん姐はん、此長家程貧乏人の多い長家はないし」
「何言ふてやんや、お竹はん、此長家かて金持が居はるし」

「マアお松さあん姐はん、此長家にお金を持つてる人が住んでるか」

天鼓夜

御料理

梅月

東区道修町五丁目
電事局 参七九番